



左上/約30食用意されたこの日のお弁当。コロッケはほくほく、おひたしはだしの味が利き、ご飯にはふりかけが。寄付された食材とボランティアの力で「ゼロ円」で整えられた食の特別な美味しさ、ありがたさに、食べて力が出た。左下/子どもに声をかける吹野さん。右/スタッフに見守られながら、きょうだい3人で食べにきた子どもたち。子ども一人でも安心して来られる食堂だ。



「よかつたら、どうぞ」と、私にもお弁当をくださった。思わず「いえ、これは必要としている方に」と遠慮が口をついたが、次の瞬間、疑問がわいた。無意識に「支援を必要としている人」と「その必要はない」と思っている「自分」の間に引いた線は、無関心や偏見へと繋がって

るとか、ちよつとした工夫で美味しくする。料理に自信が持てないお母さんには、「完璧でなくていい」と分かってほしい。スタッフの一人が「家では、こんなに色々作らない」と笑う。そんな忙しいお母さんにこそ、たまには人の作ったものを食べてラクになってほしいのだ。

看板が上がると、三々五々、利用者がやって来る。子どもと自分のお弁当2つを取りに来たお母さん、きょうだい3人で食べにきた子ども、黙って一人で入ってくる子。吹野さんはみんなに、励ますように話しかける。乱暴な食べ方や極端な偏食から、家庭の問題が見えることもある。それに直接介入はできないが、野菜を嫌がっていた子が「美味しい」と言ったり、一人で来ていた子が母親を連れて来たり。ここで食べることで子どもが変化してゆく。それを見て、スタッフも発見やエネルギーを得る。吹野さんは去年、この食堂をバージョンアップさせ、夕食付きの学習支援を始めた。

「よかつたら、どうぞ」と、私にもお弁当をくださった。思わず「いえ、これは必要としている方に」と遠慮が口をついたが、次の瞬間、疑問がわいた。無意識に「支援を必要としている人」と「その必要はない」と思っている「自分」の間に引いた線は、無関心や偏見へと繋がって人って進化できると思うんです」。

いないだろうか？ 多くの人の配慮と思いが詰まった、この学びの多い食を「必要ない」と拒絶するのは、残念なことだ。二足歩行を始めたばかりの初期人類が、絶滅を免れたのは、集団で食糧を確保し、それを公平に分け合って食べる「共食」という知恵があったおかげだといわれている。2012年に現れた子ども食堂がある。2012年に現れた子ども食堂がある。10年足らずで約3700軒に激増したのには、先の見えない時代を、人類最古のサバイバル術である「共食」で乗り越えようとする本能的な反応ではないか？



吹野佳代さんは、元保育士。尼崎市役所を早期退職して、「ちびっこステーションひだまり」を立ち上げ、子どものサポートを行う「ポポポプレイス」，“地域リビング多世代交流拠点”『ふらつとカフェ』で、子どもとお母さんの支援活動を展開。「食べて喋ってホッとして。思い詰めた時、子どもにも大人にも、『あそこに行ったらなんとかなる』という場がない」と。

一般社団法人ポポポプレイス
「ポポポ」は、ハワイ語で癒しの方法の意味。尼崎市の青少年や親子に向け、地域の居場所として支援を行うスポットとして設立された。地域住民の交流、子育てや教育に関するイベント、ママのストレス解消に役立つ活動を開催している。斜め向かいにあるカフェを会場にオープンする、主に小中学生を対象とした地域食堂「キッチンポポポ」の参加費は大人500円、子ども100円。当面はテイクアウトのお弁当での開催。スケジュールはHPを参照。●尼崎市上坂部3-3 ponpon-hdmr.com

SDGsとは？

SDGs (Sustainable Development Goals) とは、国連が掲げる「持続可能な開発目標」。17の分野別グローバル目標と、それに紐づく169項目のターゲットが盛り込まれ、2030年のゴールを目指し、世界の官・民・企業が共に普及推進活動に取り組んでいる。



(※1) 2014年に、厚生労働省が、(2012年時点の)日本のこどもの貧困率は、16.3%。6人に一人が貧困状態であると発表した。(※2) 民間団体の全国子ども食堂支援センター「むすびえ」によると、子ども食堂の数は、2019年、全国で3718カ所。利用を子どもに限定せず、「地域食堂」、「みんな食堂」と名乗るケースも多い。

食のSDGs 事典

第3回

【地域食堂】



「日本の子ども6人に1人が、貧困状態にある」。厚生労働省の衝撃の発表(※1)を受けて、全国で、子どもたちに無料や安価で食事や団欒を提供する「子ども食堂」が立ち上がった。その動きは、対象を子どもに限定しない「地域食堂」として広がっている。

危機の時代を乗り越えるための「共食」という人類の知恵

JR塚口駅から徒歩10分ほどの住宅街で小中学生らを中心に1000円で食事を提供する子ども食堂「キッチンポポポ」。代表理事の吹野加代さんは、あえてそれを「地域食堂」と呼んで、子どもに加えその親、さらに地域の誰でも歓迎する。「貧困や、苦しい状況にある子どもの支援は、根底にはありますよ。でも、そこだけに焦点を当てると、来られなくなる人も多いでしょう?」。

保育士として25年のキャリアがある吹野さんは、2014年に尼崎市が計画した子育てサポート施設「ちびっこステーションひだまり」を立ち上げた。しかし、公的な支援が届かない所で悩んでいるお母さんや子どもたちがいかに多いか。「リラククスして悩みを言える場が必要。そこに食があったら、心もほぐれるはず」。「ひだまり」が休みの日に手作りのスイーツで親子カフェを開催。お母



ボランティアスタッフには「子どもが喜ぶ顔がみたくて」と、大阪から通う男性もいる。皆が空き時間に来て、自分の得意なことを手伝う無理のないスタンスが特長のポイント。

「子どもも大人も「共食」で学ぶ」

「キッチンポポポ」は17時オープン。準備は、午後の早いうちから、ボランティアスタッフ6人がかりで始まっている。通常はブッフェ形式だが、新型コロナウイルス感染予防のため、お弁当での提供だ。この日のメニューはコーン入りのコロッケ、おひたし、大根サラダ、つくね。食材は企業や「フードバンク関西」などの支援団体、市場、家庭菜園をしている人たちが寄付されたもの。ありあわせで、彩りも栄養バランスも良い食事を調える手際に驚いた。「手間はかけてないんです。インスタントのだしに煮干しを加え

さんたちのニーズに耳を傾けた。さらに年代を問わず利用できる。地域のリビング多世代交流拠点「ふらつとカフェ」をオープン。「近隣に住んでいる人が一緒に食べて顔見知りになって、道で会ったら挨拶する。孤立しがちなお母さんたちに

は、それだけでも心強いですよ」。それは食というソフトパワーを使って、地域に眠る人的資源を、発掘する試みだ。

構成・文/沢田眉香子
撮影/バンリ